

エラスムス『キリスト者兵士必携』における 金と富の問題

濱 和弘

HAMA, Kazuhiro

目次

序

1. エラスムスにおける「中間的なもの (medium)」
2. 金と富の用い方
3. 『必携』における金と富に対する対処法
4. 金と富の問題の根源

結語

序

エラスムス (以下 Er. と略す)。この名は「ヒューマニストの王者」という称号と共に、確かにその名を歴史に残している⁽¹⁾。

その Er. の *Enchiridion Militis Christiani* (邦題、『キリスト者兵士必携』、以下『必携』) は、その Er. のキリスト教思想と倫理観が最も良く現れていると言われている⁽²⁾。筆者は、一牧師として牧会の現場に立つ者として、かねがねキリスト教ヒューマニストとしての Er. に深い関心を持って見てきた。その牧会の現場から現代の日本社会を見たとき、そこに映る問題点の一つは人間の欲の問題である。とりわけそれは金と富の問題となって現れているように思われる。

金と富の問題は、高度に資本主義経済が発展し経済のグローバル化が叫ばれる⁽³⁾今日の日本においても、様々な社会問題の根幹にある事柄である。その金と富の問題において、まさに近代資本主義経済が形成されつつあった15世紀後半から16世紀⁽⁴⁾にかけて、当時を代表するキリスト者

であった。Er. がどのような発言をしていたのか、興味を引くところである。

エラスムスに関してはホイジンガやペイントンなどによる伝記的考察やエリカ・ルンメルの研究、我が国においても木ノ脇悦郎や金子晴勇の研究書があり、『必携』に関しても先の金子が人間論の視点から、赤木善光がキリスト論の視点から、また大曾根良衛が教育者の視点から研究した論文、海外では A. Auer による研究があるが、『必携』におけるエラスムスが金と富の問題に焦点を当てた研究を筆者は知らない。

しかし、Er. は『必携』において、主に Canon quartus (第4教則) と Canon sextus (第6教則) で金と富の問題について確かに述べている。そこで、紙面の関係もあり詳細な叙述はできないが、『必携』における金と富に対する彼の考え方を、彼の叙述に添いつつ Er. の人間観と欲望あるいは欲求の問題を視野に入れつつ見ていくことにしよう。

1. エラスムスにおける「中間的なもの (medium)」

Er. は、神が人間を創造し、神の像を与えたことに、人間の尊厳性の根拠を置く⁽⁵⁾。そしてその人間は、善き行いにおいても悪しき行いにおいても主体的決断をなす倫理的存在であり、行った行為に対しては責任を負わなければならないというのである。

この人間の倫理的決断性を Er. は、霊と魂と肉による三論的人間理解によって説明する。すなわち、人間の霊は神的なもの、すなわち善を求めるものであり、肉はこの世に属するものを求める。そしてその中間にあって、霊につくか肉に着くかの決断を与えるのが魂なのである。つまり、魂の決断が人間を天的な存在にもこの世的な存在にもするし、徳にも向かわせるし悪徳にも向かわせるのである⁽⁶⁾。

このように Er. は、人間の決断性によって人間は善にも悪にも向かう中間的存在であると述べるが、同時に人間の行動の結果にも「中間的なもの」と言う第3極を設定する。本小論で取り扱う金と富は、この人間の行動の結果としての「中間的なもの」に属する。それは人間の経済活

動の結果産み出されるものだからである。この人間の行動の結果としての「中間的なもの」は、それ自体は善悪を持たない中立白紙的なものであるが、その結果を更にどのように用いるかという用い方次第によって、善ともなり悪ともなる。Er.の言葉を見てみよう。長い引用になるが、そのまま引用する。

このように事物には一般に三つの秩序があります。すなわち、あるものは徳義たりえないほどに不道德なものです。例えば、不正に対する報復とか、人に悪しきことを願うことです。これらのものは、どんなに利益や苦痛が期待されていようと、つねに拒否されなければなりません。なぜなら善人を傷つけるものは、不道德という一つのことにほかないからです。それに対して、あるものは不道德たりえないほど徳義の高いものです。この種のもは全ての人に対し、善を欲することと誠実に援助すること、悪徳を憎むこと、敬虔な談話を歡ぶことです。しかし、あるものは〔以上二つのものの〕中間のものです。例えば、健康、美貌、強壯、雄弁、学識とこれに類するものです。従ってこの種のもはそれ自身のために何も追求されるべきではなく、最高の目標に役立たない限り大なり小なり利用されるべきではありません。これらのものは実際、哲学者にとってある種の不完全で中間的目標であって、そこに立ちどまってはならないし、使用して享受しないことがそれらに対してふさわしい態度なのです。だが、中間的なものは全て、同じ仕方ではないけれども、キリストのもとに進みゆく人たちに役立ったり害になったりします。従ってそれらがもっている価値に従って採用されたり拒絶されたりしなければなりません。美貌、身体の強さ、財産よりも知識の方がはるかに敬虔の助けとなります。また学識は全てキリストに帰せられうるとしても、ある道は他の道よりも近い道を取って行くのに役だっています。この目的から中間的なものは利用するかしないか判断されなければなりません⁽⁷⁾

この言葉を見ると、Er. は、「中間的なもの」というものは最終的な目標に向かう中間の段階、すなわち過程であると考えていたようである。つまり、ある一つの行動の結果、得られた一つの事態あるいは出来事は、その次の段階に用いられるためのものであって、それ自体は本来目標とされるべきものではないのである。この「中間的なもの」は、その目標が徳に関わるものであれば霊的な方向性に向かわせる善として機能し、悪徳に関わるものであるとするならば、肉的な方向性に向かわせる悪として機能する。例えば、Er. が「中間的なもの」としてあげる知識は、学問を学ぶことによって得られる結果である。この知識をもって人に役立てることに用いるならばそれは徳となるが、逆に人を陥れ苦しめるために用いるならばそれは悪徳となるのである。

このように、「中間的なもの」は、本来使用されるべきもので、それ自体が本来目標とされるべきものではない⁽⁸⁾。したがって、「中間的なもの」を目標とするならば、それは人間のあるべき目標を見失わせてしまうものとなるのであるから、それは人間に取って悪徳となる。と言うのも Er. は、人間は他者のために役立つものとして存在していると考えていた節があるからである。それは彼の次のような言葉の中に窺われる。

あなたは絶えず次のようなキリスト教の逆説的言論を確立して下さいように。つまり、キリスト者はだれも自分のために生まれてきたとは考えないし、だれも自分のために生きようと願ったりしないで、自分が所有し、自分の存在であるものは全て自分自身に帰さないで、造り主なる神から受けたものだとして主張すべきであり、自分のもつ⁽⁹⁾全ての善いものは全ての人と共有の財であると考えなければなりません。

ここでは、我々が所有するものは、全て共有の財産であると述べている。また別の箇所では、このようにも述べている。

全ての人の幸福を自分のそれと同様に喜びましょう。全ての人の不幸を自分のそれと同様に嘆き悲しみましょう。泣くものと共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶことは、疑いもなく使徒が命じていることなのです(ロマ12・15)。否、かえって自分自身の災いよりも他人の災いを真剣に負うべきです。自分自身の幸いより兄弟の幸を多く喜ばなければなりません。⁽¹⁰⁾

この発言の背後には、我々のためにご自身を与え十字架に付けられたキリストの姿が読み取れる。そしてそのキリストに倣って生きるということがEr.の倫理的思想の中核に在るのである。従って、「中間的なもの」を他者のために役立てて用いることなく、「中間的なもの」に属するものそれ自体を自己のための目的として対象化することは、Er.にとっては悪徳なのである。

ここで、我々が所有するものは、全て共有の財産であると述べていると述べる時、そこには、物質的な財もそれに含まれる。つまり、Er.にとっては、金や富はこの「中間のもの」に属するものなのである。しかも、この「中間のもの」においても、その重要度は決して高くない⁽¹¹⁾。したがって、金と富それ自体には意味がなく、また目的とされるべきでもない。それは使用されるべきものであって、どのような目的のために使用されるかによって、人を霊的生き方に導き徳に至らせるか、人を肉体的生き方に導き悪徳に至らせるかが決まるのである。だとすれば、問題は金と富をどう用いるかにある。

2. 金と富の使い方

一般的に、我々が金と富の有効性と目的を考える場合、そこには所有の問題があり、将来の出費に備えた貯えの問題があるのではないだろうか。実際、Er.も、この金と富の問題に対して、所有の問題と結びつけ次のように批判する。

しかし、ただ名前だけでキリスト教徒にすぎない大衆は私に（筆者注：Er. が富を所有することではなく、富を軽視せよと言うことについて）抗議して、きわめて狡猾に自分自身を欺くことを喜んでいるのです。「私たちは必要に促されて財産を負っているのだ。財産がなかったなら、生活することは全くできない。財産が乏しいと、快適に生きることはとてもかなわない。それが可成りのもの、いっそう豊かになるなら、きわめて多くの快適をもたらすのだ。財産を十分にもつならば、人は健康を気遣い、子どもたちに配慮し、友人たちに満足を与え、軽蔑されることがなくなり、最後に名声も高まるのだ」⁽¹²⁾と。

この Er. の批判には、今日の我々が考え得る金と富の有効性にかかわるものがほとんど網羅されている。すなわち、快適な生活、健康に気遣い、子どもたちに配慮すると言った将来への備え、そして、友人たちに満足を与え、軽蔑されることがなくなるといった帰属の欲求の充足、そして名声も高まると言う自我の欲求あるいは自己実現の欲求の充足である。このような欲求は後に詳しく述べる 20 世紀半ばに米国の心理学者マズローが提唱した欲求段階説に通ずる。しかし、そのような欲求に対して Er. は「彼らは必要という名目で自分の欲望の言い訳をしている」⁽¹³⁾と厳しく批判するのである。

このような Er. の批判の背後には、Er. の信仰理解が在る。Er. は、『必携』の中で、何度か神に対する信頼、キリストに対する信頼について語る。⁽¹⁴⁾例えば我々は、Er. が金銭に関して語る次のような言葉を見ることができる。

お金を所有することは罪過ではないのですが、お金を崇拜することは悪徳に結びついています。お金が一杯入ってくるなら、良い管理人の職務を果たしなさい。だがもしあなたからこの職務が取り上げられるなら、なにか重大なものが奪われたかのように力を落とさない

で、かえって危険な重荷が取り除かれたのをよろこびなさい。しかしながら、人生の主なる努力を財産を集めることに使い果たし、財産を何か優れたもの願わしいものとみなし、さらにネストルの老年にいたるまで長いあいだ手許に保管しているひとは、よい商人だとよばれるのは正しいかもしれないが、私としては彼をキリスト者と呼びはしないでしょう。というのは、彼は自分自身に全く依存しており、キリストの約束を信じていないのですから。その善意により小雀が親切に食をあたえられ着物を着せられるようになさるようになさる方は、自分を信じる敬虔な人たちを見捨てたもうでしようか。⁽¹⁵⁾

ここで Er. は、神が神を信じる敬虔な者たちの養い主であるのだということを主張する。すなわち、金が人を養うのではなく神が人を養うのである。それゆえに金銭が人を養うと考え、金に依存し、金に信頼を置き、快適な生活と健康、自己と子供たちの将来の安心、あるいは名誉の根拠として金により頼むことは「お金を崇拜する」ことに他ならないのである。なぜならば、そのように金銭により頼む態度においては、人間の生命や存在そして尊厳性を与え、それを維持させるものが金であると考えているからである。だからこそ自分自身を金に投げかけ、それにより頼むのである。そのような態度は「お金を崇拜する」ことであるという Er. の言葉には、マモン化する社会に対する彼の痛烈な批判がある。従って、彼にとって金と富の問題、またそこから引き出される所有の問題は、単に経済問題や倫理の問題に留まるのではなく、何を信じ、何に依り頼んで生きるかという信仰の問題なのである。

Er. にとって信仰とは、神を信じる、己の全ての存在をかけて、十字架で死なれたキリストに自分自身を投げかけてより頼むことである。⁽¹⁶⁾ 当然、そのように信頼する者の生き方は、必然的にキリストを模範としてキリストに倣う生き方にならざるを得ない。そして、そのような信頼があるからこそ、「富を所有するのではなくて、富を蔑視することが真に偉大なのです」⁽¹⁷⁾と断言できるのであり、また「真の名誉は富の報酬ではなく、

徳の報酬である⁽¹⁸⁾」と言えるのである。また仮に、富が友人を与えるようなことがあるとしても、そのように富のために集まった友人はあなたの友ではなく富の友である⁽¹⁹⁾と指摘することも出来るのである。

こうして、富はそれ自体を所有することが目的（frui）ではなく、別の目的のために使用（uti）されるべきものであると Er. は主張するのであるが、この使用法を知っていないと、富は我々を破滅に導くものとなる⁽²⁰⁾とも警告する。だとすれば、Er. が考える正しい使用法とはどのようなものであろうか。

Er. が人間の存在意義を、他者のために役立つものとして存在するところにあると見ていた。それゆえ既に述べたように、富は決して個人のものとして自分のためにもちられるのではなく、他者のために用いられる共同体の共有財産として捉えられている。

この場合、この富を共有財産として所有する共同体は、第一義的には教会というキリストの共同体である。もっとも、Er. の時代は、西方社会がカトリック教会の下にあるいわゆるキリスト教一体社会であるからして、実質的には社会全体を指すと考えても差し支えがない。だとすれば、Er. は、富を社会全体の共有財産として再配分することを考えていたといえることができる。

それだけではない、神の創造の業である人間の尊厳を重んじるヒューマニストである Er. の視野は、単にキリスト教社会における共同体だけに止まらず、人間社会全般を視野に入れていた⁽²¹⁾と考えられる。そのことを、彼が『必携』の *Opiniones Christiano Dignae* の項目で語っている言葉を追いながら見て行こう。彼は次のように述べる。

姦淫する者、神を冒瀆する者、トルコ人がいるとしましょう。姦淫する者は呪われるべきであります、人間そのものはそうではないのです。神を冒瀆する者は拒絶すべきですが、人間をではないのです。トルコ人は殺すべきですが、人間をそうすべきではありません。自分で自分に形成した人が滅び、神が造りたもうた人間が救われる

ように尽力すべきです。全ての人に心を尽くして善を欲し、善行をなすべきです。⁽²²⁾

ここでは、人間が後天的に得たアイデンティティを超えて、神が造り給うたということのゆえに、全ての人に対して、善行をなすべきであることが述べられている。また、困窮にかられて身を売る少女の例として、このようにも述べている。

一夜の賭け事で数千の金があなたから消えてしまっているのに、その間に不幸なる少女が困窮にかり立てられて身を売り自分の貞操を奪われ、魂を滅ぼしているのです。キリストはこの魂のためにご自身の魂を与えたもうたのです。あなたは言います。『それは私にとり何だというのか。私は自分のものを好きなように処理するのだ』と。このように言った後に、こんな精神状態にありながらあなたは自分が人間でさええないのにキリスト教徒であると考えることができるでしょうか。⁽²³⁾

ここでは、自分の財を用いて困窮のために身を売ろうとする少女を助けないことは、キリスト者という後天的に得たアイデンティティ以前の、神が創造された人間として在るべき姿ではないと述べられている。そこには、困窮したものを助けるのは人間として当然のことなのであるから、いわんやキリスト者がそのような生き方をしないとはいかなることかという Er. の厳しい批判を見ることができる。つまり、キリスト者であろうとなかろうと、困窮している者を助けるのが、神に創造された人間の在るべき姿であるという Er. の主張があり、人間本来の在るべき姿、人間像が垣間見られている。このような Er. の人間像は、神の造られた人間は全て尊いという創造論の人間像である。

このような、創造論的人間像に立って Er. は、キリスト者に自己の欲求を満たすために富を形成するのではなく、富を用いて相互扶助的な社

会の形成を求めるのである。

いずれにしても、Er. は金や富は、それ自体が目的化され対象化されるのではなく、他者のための公共の福祉（*publica utilitas*⁽²⁴⁾）に用いてこそ意味があるのであり、キリスト者がそのような金の用い方をすることを通して悪魔と罪とが支配する「この世」に、神とキリストが支配する共同体が広がり、確立されるのだと考えていたのであると言うことができよう。

このようにしてみると、Er. の主張には、個人主義と資本主義社会に支えられる社会がもつ根本的な問題に対する痛烈な批判があることがわかる。

3. 『必携』における金と富に対する対処法

『必携』は、「キリスト者は如何に生きるべきであるか」ということを端的にまとめた手引書である。そして、その背後には近代的敬虔における *Imitatio Christi* がある。この倣うべき相手であるキリストは、完全な人間の原像（*archetypum*）である。従って、『必携』のテーマである「キリスト者は如何に生きるべきであるか」ということは、「人間が如何に生きるべきであるか」ということを示す手引書でもあると言える。それを Er. は、22 の基本的教則と金と性と名誉心を含み 7 つの特殊な悪徳⁽²⁵⁾ に対する対処法によって示してきたのである。ここでは、彼が『必携』で示した敬虔の手引きから、金と性の問題に対する対処法について見て行くことにしよう。

Er. が『必携』において 22 の教則を作り、その教則をもって読者を敬虔な生活に導こうとしたことは既に述べた通りである。その 22 の教則の中で、Er. は繰り返しキリストが我々の模範であると言う。それは、我々の模範であるキリストを知るということが、この 22 の教則の重要な主題の一つであることを意味する。つまり人間は、「この世」にある限り、人間の模範であり原像であるキリストを知り、そのキリストの模範に倣うと言う姿勢を持って生きていかなければならないと、Er. は言うのである。

では、このキリストの模範に倣って生きる生き方とは、具体的にはどのようなものなのだろうか。それを、一言で言うならば、我々はキリストに倣って一つ⁽²⁶⁾なのであるから、互いに支え合い、いたわり合い、重荷を負い合うべきであるという隣人愛の強調である。この隣人愛をもって「キリスト者は自分が全ての人に奉仕するものであって主人ではない(マタ 20・25-28)⁽²⁷⁾」と Er. は言うのである。つまり、「キリストに倣い」キリストを模範にして生きると言うことは、「隣人愛に生きる」と言うことなのである。

このように Er. は隣人愛を強調するが、この場合、いったい隣人とは誰であろうか。彼が隣人愛を語る時、「我々是一个である」と言う。Er. が「我々是一个である」と言うとき、それが単にキリスト教世界内だけでなく、教会の外をも視野に入れた人間全体にまで広がっていることは、先に述べた Er. の「トルコ人は殺すべきですが、人間をそうすべきではありません」という言葉⁽²⁸⁾からも明らかであろう。Er. にとって、人間はすべてから神の創造の業として一つなのである。人間を区別する差異は、すべて後天的なものである。したがって Er. にとって、全ての人間は神の創造の業である人間として「汝とわれ」の関係において愛されるべき人格であって、決して「それとわれ」という対象化された存在ではない。それがたとえ姦淫を犯した者であっても、神を冒瀆する人であっても、またトルコ人(異邦人)であったとしてもである。そこには、全ての人に対して向けられた隣人愛がある。

この人間に対して向けられた隣人愛こそが、Er. の倫理原則である「キリストに倣って生きる」と言うことを基礎付けるのである。そしてこのキリストに倣って隣人愛を実践するということが、Er. が主張する金と富の問題に対する対処にも適用されるべき行動原則なのである。

4. 金と富の問題の根源

Er. は、金と富それ自体は無記白紙的な「中間的なもの」であるという。その「中間的なもの」である金と富が所有の問題と結びつくとき、それ

は現象としては悪徳となって現れる。それは格差社会がもたらす様々な社会問題や、金と富がもたらす様々な犯罪に直面している我々も認識するところである。

Er. は、このことについて *Adversum Irritamenta Avaritiae*（貪欲を刺激するものに対して）において述べている。貪欲は、Er. が『必携』で取り挙げた特殊な7つの悪徳（好色、貪欲、名誉心、心の高ぶり、横柄、怒り、復讐心）の一つである。Er. が、この7つを特殊な悪徳とした背後には、カトリック教会の7つの大罪を意識されているかもしれない。7つ大罪とは、人間の具体的な行為罪を引き起こす根源的な罪である。Er. が、7つの特殊な悪徳を7つの大罪になぞらえていたとするならば、彼は、これらの7つの特殊な悪徳が、人間の悪徳の根源にあると考えていたことになる。実際、この7つの特殊な悪徳が、様々な現象としての罪や悪徳を産み出している。

ここでは Er. は、問題は金や富であるとは言わず *irritamentum avaritiae*（貪欲を刺激するもの）であると言っている。つまり、問題の中心は「中間的なもの」である金や富そのものではなく、金や富を通して人間の貪欲が刺激されることが問題なのである。

近代において、A. H. マズローによって人間の欲求、あるいは欲望に関する階層的構造が明らかにされたが、そこで言われる人間の欲求の根底にある基本的欲求は、人間の生命の維持のための生理的欲求と安全の欲求である。これは、人間が生きるのに必要なものを欲する欲求であり欲望であるが、人間が金や富を欲するのは、そのような生理的欲求や安全の欲求といった基本的欲求によってではない。生理的欲求が求めているのは、食料や水であり、安全の欲求が求めるのは健康や安定である。このような生理的欲求や安全の欲求に絡んで金銭が求められるのは、金銭がそれらの欲求を満たすための対価、すなわち交換手段として用いられるからである。それゆえに、基本的欲求を満たすことを超えて金や富自体を欲する時には、もっと違う欲望に突き動かされているのである。このことを Er. は鋭く見抜いている。だからこそ「それにもかかわらず、あ

なたと言う人は、必要なものを自然の必要によってではなく、欲望の目標によって量っているのです。しかるに敬虔な人にとり、少なすぎる程度で十分なのです⁽³⁰⁾と言うのである。それは、先に必要があつてそれを求めると言うのでなく、Er. が言うごとく、まず最初に欲望があつて、それに応じて必要が造られると言うことである。つまり、我々には潜在的に金と富とを欲する欲望があると言うのである。

その欲望に対して、Er. は「しかるに敬虔な人にとり、少なすぎる程度で十分なのです」と言う。そこには、我々を養いたもう神⁽³¹⁾に対する信頼がある。つまり、Er. は、金の問題を論ずるに当たって、既に述べたように、まずは神に信頼し「神は人が生きるに当たって必要なもの全てを与えたもう」というキリストの約束に対する信頼、それはすなわちキリストに対する信仰なのであるが、その信仰を求めるのである。

にもかかわらず、人はそれなりの合理的な理由をつけて富を形成するために金を追求する。それこそ、その合理的理由とは、先に述べた快適な生活や健康への気遣いとか、子供たちへの配慮と言った将来の備えなどである。それは、神が与え養い給うものよりも、富が与える快適な生活の方が優れていると言っていることに他ならない。従つてそれは、神よりも金に信頼を置く態度であり、結果として金を崇拜することであつて、偶像礼拝でありマモン⁽³²⁾に仕えることなのである。

だから Er. は、金と富がもたらす快適な生活は「この世」における肉体的快適さであり、肉に仕える快適さであると言う。そして肉的生活の快適さは、人間の精神を養うものではないと断言する。この Er. の主張の背後には、人間の命はいつ失われるかもしれないという人間の命の不確定さと儚さが意識されている。肉における快適さの追求は、目に見えるしかし儚い事物の幻影の追求に過ぎないのである。だからどんなに金⁽³³⁾が快適な生活を与えてくれると信頼して富を蓄えても、それはあくまでも人間の肉に仕えるものに過ぎず、結局それは、人間を真に利するものではないと、Er. は読者の信仰的理性に訴える。なぜならば、人は神とマモンに同時に仕えることなどはできないからである⁽³⁴⁾。そして、そのような

この世の快適な生活を求めてマモンに仕える生き方は、現世的な貪欲な生き方であって霊的な命を失わせ、終末における神と共に在るという真の快樂から我々を遠ざけるのである。

結語

ここまで我々は、Er. の金と富に対する態度について概観してきた。それらを見ると、金と富の問題の根底には神に対する信頼の問題があることが分かる。つまり金と富の問題は単に倫理の問題ではなく信仰の問題なのである。

Er. は金の問題に対して、神は信じる者を養いたもうお方であると言うキリストの言葉に対する信頼と終末論的期待を喚起することで、金や富に信頼するという偶像礼拝、マモン崇拝から離れることを勧めている。それは、偶像礼拝が肉の命に快樂をもたらしたとしても、終末的な霊の命を損なうならば、それは人間にとって取り返しのつかない大きな損失となるからである。

もちろん、金と富の問題が倫理の問題であることも見落されてはいない。だからこそ、Er. にとって金と富の問題は、隣人愛の問題ともなるのである。

そもそも金と富の問題は、経済活動があるところについて回る。だとするならば問題の焦点は、それを何のために用いるのかのかという目的（furi）と、その手段（uti）である。これが逆転するとき、それは悪徳となる。そしてEr. にとって、金と富は他者のため（公共の福祉）という目的に用いる手段にしか過ぎないのである。

ところで、M. ウェーバーが指摘した⁽³⁵⁾ 17世紀のピューリタンの金と富に対する姿勢は、Er. が『必携』で取り上げた悪徳に通じる姿勢とは少々異なっている。というのも、ウェーバーが見たピューリタンの金と富に対する姿勢は、彼らの終末論的視点に深く関わっているからである。つまり、金と富の問題とが神の救いや祝福の問題と密接に結びついているのである。だとすれば、ピューリタンの背景を持つ者にとっての金と富

の問題に関しては、Er.が『必携』で述べていることは、全く意味をなさないであろうか。必ずしもそうとは言えない。と言うのも、Er.は次のように言っているからである。

だが、富はもろもろの快樂の方は準備しています。まことにそのとおりです。しかし死をもたらす快樂を準備しているのです。それは名誉をもたらしてくれます。だが、いったいどんな名誉ですか。馬鹿ものだけが驚嘆し、もしその人たちに気に入られたならば、それは非難されるに等しい人たちが、実際間違った名誉を与えているのです。真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されることであり、最高の名誉はキリストに受け入れられることです。真の名誉は富の報酬ではなく、徳の報酬⁽³⁶⁾です。

ここにおいて、金と富の問題は、単に生活の快適さや快樂の問題だけでなく名誉の問題と結び付いている。その名誉について、Er.は名誉には偽りの名誉と真の名誉とがあると言う。そして真の名誉とは、称賛されている人たちによって称賛されることであり、最高の名誉はキリストに受け入れられることである。この称賛されている人が誰であるかは特定するのは難しいが、『必携』全体から考察するに、おそらく聖フランチェスコのような非所有の下で清貧を生きた敬虔な人々を指していると思われる⁽³⁷⁾。

この真の名誉の中で、最高の名誉はキリストに受け入れられることであるが、これこそがピューリタニズムが求めたものであり、その名誉の証しが、労働の結果得た金や富である。しかし、Er.は「真の名誉は富の報酬ではなく、徳の報酬です」と言い、金や富が救いや神の榮譽や祝福の証しであるという考え方をきっぱりと否定する。そこには「あなたの榮譽はキリストの十字架のうちにあります⁽³⁸⁾」というEr.の名誉に対する考え方がある。つまり、キリスト者にとって真の名誉の原型は、人々のために十字架の上で苦しみ、自らを人々に与えて死なれたイエス・キリ

ストの姿なのである。そしてキリスト者は、このキリストにある真の名誉に与っている者であり、だからこそ自らもまたキリストのように、自分を他者に与えて生きる者となって初めて真の名誉を神から与えられるのである。

Er. は、神から与えられる真の名誉は「中間的なもの」によって与えられるものではないと言う⁽³⁹⁾。むしろキリストに倣って生きる徳ある生活こそが、真に名誉ある生き方なのであって、富はそのために用いられるべきものなのである。

従って、ウェーバーが指摘した金と富が救いと祝福の証しであるというピューリタニズムにおける理解も、また個人や教会の成功や繁栄を神の祝福と結び付けて考える現代の一部の教会に見られる傾向も、Er. の見解によればはっきりと否定されるべきものなのである⁽⁴¹⁾。

注

- (1) 木ノ脇悦郎「エラスムスにおける Philosophia の論理」『福岡女学院短期大学紀要』第 16 号別冊、1980 年、1 頁参照。
- (2) 金子晴勇『エラスムスの人間学』知泉書院、2011 年、81–83 頁参照。
- (3) 内閣府「平成 16 年度、年次経済財政報告（経済財政政策担当大臣報告）」<http://www5.cao.go.jp/j-j/wp/wp-je04/04-00301.html>（2014 年 11 月 18 日最終閲覧）や、「独立行政法人経済産業研究所」http://www.rieti.go.jp/jp/columns/s08_0010.html（2014 年 11 月 18 日最終閲覧）を参照。
- (4) 近代的資本主義の形成がいつからであったかについては、諸説があるであろう。そこで資本主義とは何かと言うこと自体が問われる。ここでは、近代的資本主義を、過去の労働の成果として得た金銭を資本として投資し、投資した資金を回転させ利益を生み出すことができるしかるべき労働力を確保し、それによって生産された商品を売買する市場や複数の市場を結ぶ流通機構が確立されることでさらに資本の投下がなされる社会状況としてとらえる。これは、I. ウォーラーstein が『史的システムとしての資本主義』川北稔訳、岩波書店、2010 年、6–8 頁、の定義にそ

うものである。実際、ウォーラーステイン自身も前述のような資本の循環は近代になるまで史的システムとしての資本主義は完結することは減多になかったと述べ(ウォーラーステイン、8頁参照)、この史的システムとしての資本主義は、私見ではあるが、15世紀末に誕生したと述べている(ウォーラーステイン、14頁)。彼のこの私見は、概ね的を得ている。というのも、15世紀後半から16世紀のフッガー家の繁栄の背後には、彼が言う史的システムとしての資本主義を彷彿させるものがあるからである。

- (5) 『エンキリディオン』(宗教改革者著作集2) 金子晴勇訳、教文館、1989年(以下 *Enc.*)、152-154頁、第28章第18教則(人間の尊厳と罪)から第30章第20教則(罪と徳の対比)を参照のこと。そこには、人間の尊厳さと、罪の結果として引き受ける人間の悲惨さが述べられている。また、エラスムスは *Enc.*、63頁で、人間の前には「ただ二つの道がありますだけです。一つは情念に仕えて破滅に導く道であり、もう一つは肉を殺しても命に導く道です」とのべ、命に導く狭い道を選び歩むように勧めている。
- (6) *Enc.*、52-57頁、金子訳の底本となった Erasmus von Rotterdam. *Ausgewählte Schriften. Bände Lateinisch und Deutsch*, 1968 ff, Darmstadt の2006年版(以下 AS)では pp. 138-150 の *De Tribus Hominis Partibus, Spiritu et Anima et Carne* の章を参照。なお、本小論における引用する場合は、特に注記がない限り、金子訳から引用する。ただし、必要と思われる場合には、As. を手元において確認を行った。また、John W. O'Mally, ed., *Collected Works of Erasmus*, 66 *Spiritualia*, University of Toronto Press, Toronto/Buffalo/London, 1988 および John P. Dolan, *The Essential Erasmus*, New American Library, New York and Scarborough, Ontario, 1964 を参考とした。
- (7) *Enc.*、70-71頁、AS, p. 170.
- (8) 木ノ脇悦郎は、「聖アウグスティヌスとエラスムス-異教古典の理解をめぐって」『福岡女学院短期大学紀要』18(1982年)、17頁において、エラスムスの古典と聖書の関係はアウグスティヌスの *De Doctrina Christiana* の第一巻にある *frui-uti* という二重の概念の構造を受け継いでいるとい

うが、ここにも、その構造を見ることができる。考えてみれば、古典は人間の知恵と知識の結晶であり、ここで言うところの「中間的なもの」である。したがってそれを、聖書を知るために用いることは、人間の徳に結びつく、なぜならば、Er. にとっては、人間に取っての徳のある生活は、罪と悪とに打ち勝つものであり、それは祈りと知識によって (*precatio et scientia*) なされるものだからである (*Enc.*、18 頁、AS, pp. 74-76 のラテン語文参照のこと)。

- (9) 前掲書、123 頁、AS, p. 268、および p. 270.
- (10) 前掲書、124 頁、AS, p. 270.
- (11) 前掲書、71 頁、AS, p. 172 そこには「従って知識は中間的なものの中では第一位を占めています。次に続くのは健康、天賦の才能、雄弁、美貌、強壯、権勢、繁栄、名声、家柄、友人、家財です。これらのうちの各々は、徳への最短の道に役立つ限りで利用されなければならないのです」とある。
- (12) 前掲書、164 頁、AS, p. 344.
- (13) 前掲書、164 頁、AS, p. 346.
- (14) Er. が『必携』の中で、神とキリストに対する信頼を語る場合、その多くは自分自身のわざに頼らず依存しないということが伴っている。それは、自分の行ったわざによって自分を救うことができないし、自分自身の力ではこの世に打ち勝つことができないからだという救済論的主張である。それゆえに金子晴勇は次のように述べる。「それではエラスムスは信仰をどのように規定しているのか。彼は次のように言う『信仰は、私たち自身に疑いをいだき、全ての信頼を神に置くようにと教示する』(*Fides praestat, ut nobis diffisi, fiduciam omnem collocemus in Deo*) と。このような信仰の理解は、信仰義認にまでつながっていくような種類のものであり、事実、エラスムスはローマ人の手紙を多く引用しながらこの義認を論じている」(金子『エラスムスの人間学』pp. 190-191、ラテン語部分は、AS, Bd. III, *Ratio seu methodus compendio ad veram Theologiam* p. 296, ll. 15-16 から)。実際、『必携』において Er. が、「自分のわざに信頼し、依存している」と批判する場合、その内容は、主にサクラメントやサクラメンタルな行為、また断食や祈り等を形式的に遵守することが敬

度な行為であるとする当時の教会の状況に対してである。そのような態度の背後に、Er. は行為が救いを約束するものであるとして、目に見える行為に対する信頼、ひいてはその行為を行っている自分自身に対する信頼を見ている。そして、そのような霊的な命を可視的な行為により頼むということを批判し、可視的行為そのものではなく、その背後にある不可視的な神により頼むという精神、心を求めるのである。それは肉の命に対しても言える。肉の命に関することを金銭という可視的事物により頼むのではなく、不可視的な神により頼むことこそがEr. にとって重要なことであり、可視的金銭に安心の根拠を置くとするならば、それは真の敬虔ではないし、そのように考えるのは真のキリスト者の在り方ではないのである。

- (15) 前掲書、165 頁、AS, p. 346 なおネストルとは、『オデッセイア』に出てくるピュロスの王。老年になっても知恵を持ち続けた賢人。ここでの「ネストルの老年にいたるまで」とは、非常に高齢であるということの強調。
- (16) 前掲書、62 頁、AS, p. 156 を参照のこと。そこには「あなたは心をあげてキリストを信じることを断行しなさい。自分により頼まないように冒険しなさい。あなたの心の心配事の全てを彼に移すように敢えてしなさい。自分に信頼することをやめ、全き信頼をもってご自分をキリストに向かって投げかけなさい。そうすれば、キリストはあなたを受けとめて下さるでしょう」とある。
- (17) 前掲書、164 頁、AS, p. 344.
- (18) 前掲書、166 頁、AS, p. 348.
- (19) 前掲書、166 頁、AS, p. 348.
- (20) 前掲書、75 頁、AS, p. 176 を参照のこと。
- (21) エラスムス「キリスト者の君主の教育」『宗教改革者著作集 2』片山英男訳、教文館、1989 年、pp. 340-342 の君主の慈善を参照のこと、特に p. 342 において、外国人への配慮やキリスト教徒以外の者も、不当に苦しめられないことが求められており、異邦人への配慮が述べられている。
- (22) 前掲書、123 頁、AS, p. 270.
- (23) 前掲書、127-128 頁、AS, p. 278.

- (24) 前掲書、133-134 頁、AS, p. 133 を参照のこと。Er. が言う「公共の福祉」とは、共同体の利益となるもので、今日の社会福祉の要素を含む慈善だけでなく、法の整備や平和の維持と言ったものも含む。エラスムスの「公共の福祉」の概念は、具体的には前出「キリスト者の君主の教育」に詳しく述べられているので、そちらを参照のこと。
- (25) 前掲書、pp. 156 以下、AS, pp. 342 以下を参照のこと。
- (26) この「キリストに在って一つ」ということは、身分や民族的・教派的立場を超えて一つと言うことである (*Enc.*, p. 125、AS, pp. 272, 274 参照)。ただし、これらは、第一義的には当時の西洋社会を覆っていたキリスト教一体世界の中での一体が意識されており、その意味では教会というキリストの体の内における一体を意味している。
- (27) 前掲書、135 頁、AS, p. 290.
- (28) 前掲書、123-124 頁、AS, p. 270.
- (29) いわゆる「マズローの欲求段階説」。
- (30) 前掲書、165 頁、AS, p. 346 を参照のこと。
- (31) マタ 6:25-33 を参照のこと。
- (32) *Enc.*、72 頁、AS, p. 174 参照のこと。ただし、このような Er. の発言が、必ずしも Er. の行動に反映されているわけではない。特に、第一回英国訪問 (1499 年-1500 年) から帰国する際に、英国によって金銭の持ち出しを制限され没収された際の落胆の様子は、ここで Er. が述べていることとはいささかかけ離れている (ホイジンガ『エラスムス』宮崎信彦訳、筑摩書房、2001 年、63-67 頁参照)。したがって、『必携』で Er. が述べている金と富に対するキリスト者の姿勢は、あくまでも、『必携』における Er. の思想であり、そこに表されたものはキリスト者の目指すべき模範であって、Er. を含み現実の事態はこれとはかけ離れており、それゆえにこの模範を目指して生きる生き方が敬虔な生き方なのである。
- (33) 前掲書、155 頁 (第 21 教則)、AS, p. 328 (Canon vicesimusprimus) 参照のこと。この「いつ命が失われるかも知れない」という感覚は、ペストを経験した当時の人々にとってはリアリティのある感覚であったことは、「死の舞踏」や「アルス・モリエンディ」等から十分にうかがい知れる。
- (34) 前掲書、167 頁、AS, pp. 350, 352 参照のこと。

- (35) M・ウェーバー「資本主義の精神とプロテスタントの倫理」大塚久雄訳、岩波文庫、岩波書店、1989年。
- (36) *Enc.*、166頁、AS, p. 348.
- (37) 前掲書、86-87頁、AS, pp. 200, 202 参照のこと。
- (38) 前掲書、170頁、AS, p. 356.
- (39) 前掲書、169頁、AS, p. 354 参照のこと。
- (40) このような傾向は、ブルース・ウィルキンソンの著作「ヤベツの祈り」がベストセラー（全米では1000万部を突破したとも言われる）となった現象などに顕著に表れていると言えよう。
- (41) 事実、Er. は「無記中立的な事柄、例えば容姿・力・財・家柄のゆえに表彰されても、正当に名誉と呼ばれはしないでしょう。なぜならば称賛されるに値しないような事がらによってはだれも名誉を獲得すると言うことはないからです」(*Enc.*, p. 169, AS, p. 354) と述べている。

(立教大学大学院キリスト教学研究科博士課程前期課程在学 はま・かずひろ)